



今江祥智 の本

第22巻

児童文学の時間です

理論社

今江祥智 の本 第22巻

児童文学の時間です

理論社

今江祥智の本第22巻

一九八一年一月初版

一九八八年五月第六刷

著者 今江祥智◎

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

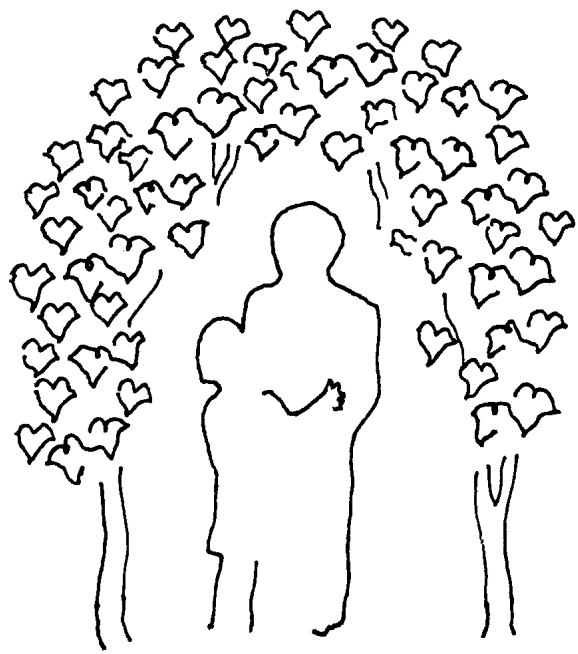
電話 営業〇三(二〇三) 五七九一

出版〇三(二〇三) 五七九四

編集〇三(二〇三) 二五七七

振替 東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます



I 大人の時間 子どもの時間

7

童話作家にとって娘とは何か 9

いくつものお月さま 14

ことば・詩・方言 22

方法をめぐって 31

ブックリスト論 47

II 子どもの国からの挨拶 57

青い大きな海がひろがってくる 59

わたしの絵本白書 73

ファンタジーの世界と方法 87

ナンセンスの世界と方法 98

III 絵本の時間 絵本の部屋 117

絵本は誰のためのものか 137

二人の男の場合 129

『絵本とは何か』とは何か 137

ああモモトラウ、または講談社の絵本

『ちびくろサンボ』なんて知らないよ

157

IV 夢みる理由

165

両者復権

167

子どもの本にかかわるきびしさ

178

大人の視座 子どもの視座

186

わたしの本棚

193

日本語と児童文学

247

V 児童文学の時間です

289

児童文学の時間です

291

寸言

353

もう一つの青春

359

それぞれの登山道

377

児童文学―昨日・今日・明日

397

あとがき

413

解説 奥田継夫

416

編集委員 上野 瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本 文 加藤文明社

表 紙 ダイニツク

カバ ー トライ印刷

製 本 誠製本

用 紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本

第22巻

児童文学の時間です

I 大人の時間 子どもの時間

童話作家にとって娘とは何か

だまされた、と思いました。生まれたときはおサルそっくり、自分の子だと思うには時間がかかる……といったことを、どれほど聞かされ読まされてきたことでしょう。確かに自分の子と思えませんでした。けれどそれは、おサルに似ていたからではなくて、親に似ぬきれ、えな子だったからでした。

そこでわたしはすっかりあわててしまい、女房のさとへ、こう電報を打ちました。

ービ ジ ヨタンジ ヨウス

ガラス箱の美女は、大きな目でとうちゃんと初対面していましたが、やがて、にっと笑ったのです！ とうちゃんはぎょうてん、女房の病室にかけこんでそう報告すると、

ーもう親バカが始まったん。先が思いやられてしまうわあ。

と、懽然たる面持になりました。生まれたばかりの赤ん坊が笑うはずがありません。単なる顔面神経の伸縮作用にすぎなかったのですが、それを笑ったと勘違いするくらい、とうちゃんはあがっていたのです。赤ん坊の表情の判断もできずに、どうして子どもの心をとらえた童話を書けるのでしょうか。

わたしは自戒し、腰をすえて、娘の発声の観察にかかりました。初めての言葉は何やらかなあ、と実にたのしみだったのです。

ところが、何ということでしょう。娘冬子の初めての叫びは、

―あいたあ！

でした。ソファーからころげ落ちたのです。頭の大きいのは子どもの常ですが、その上、冬子はやせっぽちでしたから、よほど不安定らしく、実によく落っこちました。そのたびに、アイタァー！ それから、アブナイネエ！ でした。

思えば、幼児にとってこの世は危険でいっぱいですから、それもまた当然なのかもしれません。

さて、次が親の呼び方です。パパ、ママは子どもに言いやすく自然だと言う人がありますが、わたしはそう思いませんでした。それなら、昔むかしの日本の子どもたちは、どうすればよかったでしょう。それで、断然、とうちゃん、かあちゃんと言わせました。冬子はごく自然に、とうちゃん、かあちゃんが言えるようになりました。ところがある日のこと、とつぜん、

―とうちゃま。

と言いだしたのです。とうちゃんはガクセンとして、冬子のひとみをのぞきこみました。どこのどいつがこんなお上品なことばを教えやがったんだい！ 冬子はにこにこして、こんどは、

―かあちゃま。

女房はこわーい目でわたしをにらみました。つねづね、あはやなあ、バカモン、おほほのほなどといったたちの悪いことばを教えるのは、いつもとうちゃんでしたから、むりありません。けれど、これはちがう。わたしはあわてて手をふりました。

やがて原因がわかりました。テレビ・ドラマ「たまゆら」のせいなのです。あの劇の中で、笠智衆一家は、おとうさまあ、おかあさまあを使っています。それを聞いていた冬子が、まわらぬ舌でまねだしたのです。

ふたりは、とうちゃま、かあちゃまには返事しませんでした。わたしたちは、あのドラマの家族たちのように上品でヒマのある種族とはちがいます。

冬子のもまねは、二、三日でなおりました。沈黙は最良の武器。

そのころの冬子は、朝寝、昼寝、宵寝、とまことによく眠ってくれました。その眠りへの誘いはレコードによる音楽でした。プロコフィエフやショパンをかけると、すぐに眠ってくれました。そして、目がさめたときに陽気なイヴ・モンタンの歌でもかけてやると、たいへんごきげんがいいのです。それを続けたある朝、五時ごろに起きた冬子は、とうちゃんの髪の手をひっぱって断固として命令しました。

—お早う、とうちゃん。レコード、モンタン！

とうちゃんは眠い目をこすりながら、モンタンのレコードをかけねばなりませんでした。

そんな毎日が続いたある日、レコードをかけながら、こちらで仕事をしていたわたしが、ふと聞きなれぬ声にふりむくと、なんと、冬子が歌っているのです。とうちゃんのフランス語なんかよりもっと正確に、

Mon manège à moi c'est toi……

モンタンばかりでなく、ジョン・バエズのフォーク・ソングでもこなしていました。むろん、断片的にですが、歌えるところについては決してごまかしません。そう言えば、当今の若いうた歌いのくねくね坊やたちは、歌の意味などわからなくても、ひたすら丸覚えするのですから、この点、連中はうちの冬子なみというべきでしょう。ちなみに、冬子はそのとき一歳十カ月でありました。

この夏、女房がからだの具合悪く、大阪へさと帰りしました。まさかわたしが、国定忠治みたいに、冬子をおんぶして仕事するわけにはいきませんから、いっしょに帰しました。ひとりになったとうちゃんは、昔読んで感動した田宮虎彦の『子別れ』を再読し、こんどは実感的に鋭い感銘を受けたことでした。

さて、一カ月はどして仕事に一区切ついたところで、会いに出かけました。玄関にはいると、冬子はちょうどふろからあがったところでした。一カ月ぶりのとうちゃんとの再会第一声は、わあああん！ でした。うれし泣きであることはいふまでもありません。それからそのときの心理状況を冬子はこう説明しました。

—とうちゃん、きゅうにくるから、びっくりしてしもたわ。

夏やせで、冬子はいっそうやせていて、その胸はまるでせんたく板でした。そして冬子は、せんたく板をふくらませて、かつて東京で覚えた歌を歌いだしたのです。

Donna Donna Donna Donna

Stop Complaining.....

ほんとによくモンクを言わずにいてくれたもんや、とわたしはしゅんとなりました。そしてそのとき、そのせんたく板ということばかり、昔むかしのおふくろとのひとときをあざやかに思いおこしていました。

わたしは三歳。おふくろがせんたく板を使って長い長いことせんたくする横にすわって、お話を聞いていました。それはもうおそろしくでたらめなお話でしたが、わたしにとって、世の中でそれほど胸のおどるお話はありませんでした。わたしがお話の主人公だったからでしょうか。せんたく板をこする単調なくり返しの音が、心よリズムになってお話の伴奏をしていたからでしょうか。いや、おふくろが話してくれたからでしょうか。

今にして思うと、そのころの毎日毎日のお話に聞きほれたことが、現在、童話を書くわたしをこしらえた遠因であつたことに、まちがいありません。

それはともかくとして、わたしは、冬子がもう少し大きくなったときには、断然、冬子のお話係をひきうけるつもりです。そのとき冬子が、あくびをしたり逃げだしたりしたらいへんです。自分の子どもを喜ばせることもできずに、どうしてひとさまの子どもの喜ぶようなお話が書けるでしょうか。

せんとく板のはやらなくなった今ではもう、あのときのおふくろみたいに、せんとく板の伴奏はできません。そのかわり、冬子のせんとく板みたいな胸をながめ、昔のおふくろのことを思いだしながら、わたしは全力をつくしておしゃべりすることでしょう。そして、そのときこそ、冬子は童話書きのとうちゃんにとって、おそるべき存在になることでしょう……。

といったことを考えていたわたしの前に、冬子はビールのちょんびりはいったコップをつきつけて、

—とうちゃん、かんばいしよう！

と言ってくれました。教育の力はおそろしい！ わたしはおそるおそる未来のおそるべき読者兼批評家と乾杯したことであります。

いくつものお月さま——何故童話を書くか

大阪の四つ橋に電気科学館という建物があります。鉄啞鈴のお化けみたいなプラネタリウムというやつがあって、それで夜空のすべてを見物させてくれるというしかけでした。

小さな男の子だったころ、わたしはそれに夢中になり、月に五、六度も通ったものでした。だしものは一カ月替わりでしたから、こちらはその説明をすっかり覚えてしまい、帰っておふくろさんに再演するのがきまりでした。わたしは、まるで自分が発見したみたいに、情熱をこめて土星の帽子やアンドロメダ星雲のことをしゃべりまくり、

——大きくなったら、天文学者になるねん。

と宣言しました。おふくろさんはこにこして、

——学者はんかいな。えらいしんどいもんになるんやなあ。

とだけ言いました。

この天文学熱はかなり長いこと続いたのですが、当時の日本は、ほとんど世界じゅうを相手にいくさの最中で、そろそろ負けがこみはじめてきていました。したがって、日本の空には夜となく昼となく敵機が飛びまわり、ためにわたしの天文学的観察は著しく妨害されました。国をあげて、「撃ちてしまえ」えいえいおう、といっ